

出題分析			
試験時間	90分	配点	100点
		大問数	4題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
【概評】 例年通り4つの大問で構成され、東洋史関連から2題、西洋史関連から2題であった。Ⅰ・Ⅲの大論述問題の字数は例年と同じく300字以内であり、Ⅰは基本知識があれば容易に解答できるが、Ⅲは知識だけでなく高度な考察力も要する難問であった。また、Ⅱ・Ⅳでは新課程を意識した大きな変化がみられ、文字資料の読解を要する設問や複数解答を求める設問が散見された。このような形式の変化に加えて、小論述問題の分量が大きく増加しており、Ⅲの大論述問題がかなりの難問であったことを考慮すると、全体的な難易度は昨年に比べて明らかに難化した。			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
Ⅰ	15世紀中頃から17世紀末に至るオスマン帝国とヨーロッパ諸勢力との抗争	Ⅲの大論述問題に比べると、かなり解きやすい問題。例年通り300字以内にまとめるのに苦労するが、論述の始点や終点は明確であるため、京大を志望する受験生であれば高得点を確保できる答案をできるだけ手早く作成したい。レパントの海戦での敗北後も地中海の制海権を維持したことは忘れずに指摘しておきたい。また、それぞれの戦いの内容やヨーロッパ以外の内容を詳述して字数を浪費しないように注意したい。	標準
Ⅱ	A：北京と周辺諸勢力 B：中国とロシア（ソ連）の関係	昨年に続き、Ⅱでは小論述問題が出題されなかった。できるだけ手早く解答を済ませ、ほかの問題の解答時間に余裕をもたせたい。 (1)・(6)・(11) (イ)・(15)・(17)・(18)：それぞれ基本的な知識だが、正確な漢字表記ができたか否かで差がついただろう。特に、「燕」が書けないことで(1)と(6)ともに失点するのは避けたい。(11) (ア)：ヘラートの位置や「永楽帝のもとに派遣された」からティムール朝だと判断できる。	標準

Ⅲ	16世紀から18世紀に至るスペインのラテンアメリカ植民地経営の特徴と変遷	「アジア産商品とラテンアメリカ産商品を具体的に対比した上で」という問題の要求があるため、交易品に関する基本的な知識だけでなく考察を踏まえてその性質まで述べつつ対比できたかどうかポイントとなるが、受験生がそれを導くのはかなり困難だったはずだ。アカプルコ貿易に関する交易品について詳述してしまった答案が大半だったと思われる。また、論述の終点は18世紀であるため、スペイン＝ブルボン家の統治にも触れたい。	難
Ⅳ	A：農耕の歴史 B：近代憲法の歴史	Ⅱと同様に文字資料の読解を要する設問がみられたが、Ⅳの資料読解のほうが難しく、何を書くべきか判断に迷った受験生が多かっただろう。 (1)：誤字に注意。(3)・(7)・(16) (イ)：小論述問題としては標準的であるため、確実に得点を伸ばしたい。(9)：「修道会の名を記せ」とあるため、戸惑った受験生が多かっただろう。(14)：両資料を見比べれば、チェロキー国憲法(前文)は明らかに合衆国憲法を模倣しているとわかる。黒人差別と男性普通選挙については、チェロキー国憲法の第3条第7節から読み取れる。(18) (ア)：考察力が試された。19世紀以降のアジア諸地域における立憲運動や欧米列強による帝国主義の展開から想起できる。(イ)：蒸気船と電信の普及に伴う交通・情報伝達手段の発達を述べればよい。	やや難

合格のための学習法

京都大学の入試世界史では、例年、Ⅰ・Ⅲの大論述問題の出来が合否を左右するといえる。今年のⅢのように高度な考察力を要する問題が引き続き出題される可能性があるため、他大学の過去問も活用しながら思考力を養っておきたい。また、昨年に比べて分量が激増した小論述問題の対策も徹底したい。論述の大小を問わず、設問の要求を正確に把握し、それに対して明確に答えているかを常に意識しながら文章を組み立てよう。特に、大論述問題は、300字でコンパクトにまとめるのが難しいテーマも頻出であるため、早くから積極的に添削指導に取り組み事前対策を万全にしておく必要がある。漢字用語の記述も油断大敵である。手を動かして「書いて覚える」のが何より重要である。